

# 自閉症児に対する水泳指導に関する研究

松田 裕加里 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)

指導教員 金田 安正

キーワード：水泳 自閉症 指導

## 1 緒言

筆者は大学1年生の後期から障害児の水泳教室「イルカ」で水泳指導を行ってきた。その際、自閉症児 R と出会う。当初 R はバトンケースで首に水をかけ、口に伝わって下に垂らすという特異な行動を行っていた。この行動が指導の妨げとなったため矯正することにした。その後、泳ぎの導入として筆者は様々なアプローチを行ったが成功した場合と失敗した場合があった。この差を検討するため今回記録を読み返し、R の行動を理解すると同時に、「こだわり行動」の矯正や指導をどのようにすればよいのかについて研究した。

## 2 研究方法

対象者は現在養護学校5年生、自閉症の男子 R である。R が2年生の頃から現在までの記録から症例研究を行なった。

## 3 結果と考察

### 1) R の水かけ行動の改善について

筆者は2007年12月20日にバトンケースを隠した。その時筆者が考えたこと、指導の手立てを整理すると下記の図のようになる。その中で唯一成功したのは「ビート板で引っ張られることで楽しさを得た」こ

とである。そのため一時的なパニックを起こしたものの、水かけ行動を矯正することが出来た。別の刺激を得たことで水かけ行動を矯正するきっかけになったのではないかと考えられる。

### 2) R への泳ぎの導入

指導期間を第1期と第2期に分け、先の表と同様に「言葉かけによるアプローチ」「行動によるアプローチ」「道具を使用したアプローチ」に分けて分析図を作成した。筆者のアプローチに対して反応があった項目を○とすると、第1期より第2期の方が○の数は圧倒的に増えていた。その理由として R が筆者を見た時に声かけするなどのタイミングがよくなったこと、指示の際にジェスチャーを加えたことなどが分かった。

## 4 まとめ

自閉症の特性「未知の体験に対応することが苦手」という点から、筆者が約3年半という年月をかけて分析図の○の数を増やしていったことが改善の大きな理由と考えられた。さらに R が少しずつ筆者の指導や場所に慣れ、距離が縮まったことも影響があったと考えられる。

テーマ		Rの行動	筆者の行動	Rの変化	評価
バトンケース	探す	見つける	ダメと言う	怒る	×
		無い	Rを見る	怒る	×
ビート板	持つ	水かけ行動をする	Rを見る	怒る	×
		にぎる	引っ張る	笑う	○
周りの物	コース	押したり引いたりする	Rを見る	怒る	×
	筆者	つねる	離れる	怒る	×
	水	たたく	見ている	怒る	×